

史跡・名勝 嵐山

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇八―一四

史跡・名勝 嵐山

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡・名勝 嵐山

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、建設工事にとまなう史跡・名勝 嵐山の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

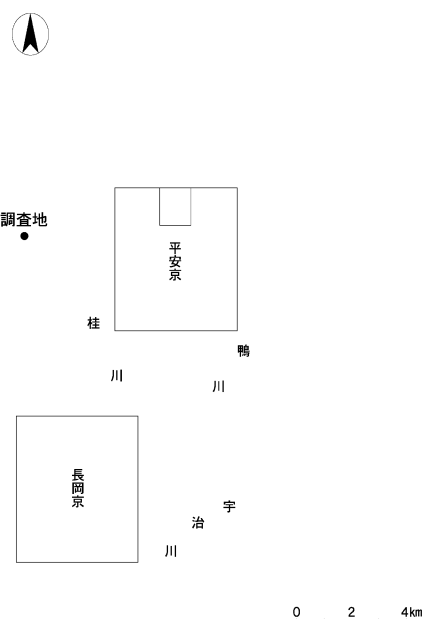
平成 21 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡・名勝 嵐山
- 2 調査所在地 京都市西京区嵐山西一川町 5-4、6-1、6-3、6-4、7-1、20、30
- 3 委 託 者 阪急電鉄株式会社 取締役社長 角 和夫
- 4 調査期間 2008年9月24日～2008年12月26日
- 5 調査面積 2,088 m²
- 6 調査担当者 木下保明・櫻井みどり
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「嵐山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 現場で付けた番号を使用し、遺構の種類を前につけた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 木下保明・櫻井みどり
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

| | |
|-------------|----|
| 1. 調査経過 | 1 |
| (1) 調査に至る経緯 | 1 |
| (2) 調査の経過 | 1 |
| 2. 位置と環境 | 2 |
| 3. 遺 構 | 3 |
| (1) 基本層序 | 3 |
| (2) 遺構の概要 | 3 |
| (3) 第1面の遺構 | 7 |
| (4) 第2面の遺構 | 11 |
| 4. 遺 物 | 15 |
| (1) 遺物の概要 | 15 |
| (2) 土器類 | 15 |
| 5. ま と め | 19 |

図 版 目 次

| | | | |
|-----|----|---|-----------------|
| 図版1 | 遺構 | 1 | 第1面東半全景（西から） |
| | | 2 | 第1面西半全景（東から） |
| 図版2 | 遺構 | 1 | 第2面東半全景（西から） |
| | | 2 | 第2面西半全景（東から） |
| 図版3 | 遺構 | 1 | 田58・59、畦畔9（西から） |
| | | 2 | 田44下層溝群（北西から） |
| 図版4 | 遺構 | 1 | 土坑36（北から） |
| | | 2 | 土坑39（東から） |
| | | 3 | 土坑3（西から） |
| | | 4 | 川2断面（東から） |
| | | 5 | 川1完掘状況（北西から） |
| | | 6 | 土坑12（西から） |
| | | 7 | 土坑13（南から） |
| | | 8 | 畦畔54～56（東から） |

挿 図 目 次

| | | |
|-----|------------------|----|
| 図1 | 調査区配置図（1：1,000） | 1 |
| 図2 | 調査地位置図（1：5,000） | 2 |
| 図3 | 調査前全景（西から） | 3 |
| 図4 | 調査風景（東から） | 3 |
| 図5 | 調査区南壁断面図1（1：100） | 4 |
| 図6 | 調査区南壁断面図2（1：100） | 5 |
| 図7 | 調査区東壁断面図（1：100） | 6 |
| 図8 | 第1面遺構平面図（1：400） | 8 |
| 図9 | 土坑36・39実測図（1：50） | 9 |
| 図10 | 川1断面図（1：100） | 10 |
| 図11 | 川2断面図（1：100） | 10 |
| 図12 | 第2面遺構平面図（1：400） | 12 |
| 図13 | 出土土器実測図（1：4） | 16 |
| 図14 | 出土土器 | 16 |

表 目 次

| | | |
|----|-------|----|
| 表1 | 遺構概要表 | 3 |
| 表2 | 遺物概要表 | 15 |

史跡・名勝 嵐山

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は、建物建設に伴う発掘調査である。当地は史跡・名勝嵐山の範囲に位置していることから、本調査に先立ち、2007年4月から5月にかけて試掘調査を実施した。その結果、室町時代の小溝群・畦畔・耕作土・流路が検出され、嵐山地区での桂川右岸の開発の歴史を知るうえで重要であると判断され、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導により、委託者からの委託を受けて、発掘調査を財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施することになった。

(2) 調査の経過

発掘調査は、面積約2,100㎡の建物建築範囲を対象に実施することになった。調査方法については、掘削土を場内で処理することになったので、東西の2区にわけて調査を実施した。また、調査に先立って樹木の伐採、アスファルト・土壌改良土の場外処分などの付帯工事を実施した。

調査においては、文化庁・京都府教育庁指導部文化財保護課・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導と助言を、9月24日、10月21日、10月30日、11月14日、12月5日、12月11日、12月19日の計7回受けた。

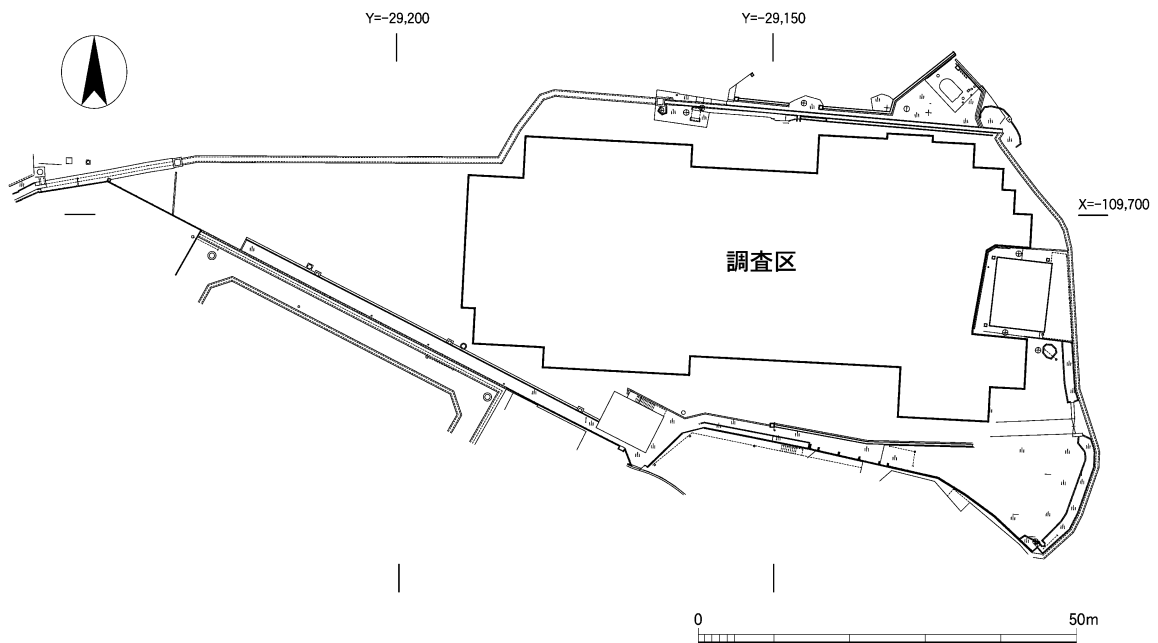


図1 調査区配置図 (1 : 1,000)

2. 位置と環境

調査地は、京都市西京区嵐山西一川町に所在しており、渡月橋付近一帯の景勝地である史跡・名勝の範囲に含まれている。当地は、渡月橋の東南約 300 m、東流する桂川が南へと流れを変える桂川と松尾山に挟まれた狭隘な地に位置している。地形的にみれば、桂川右岸の自然堤防の南側の後背湿地（氾濫原）上に立地している。調査地の南側には一井川が流れている。

調査地の周辺は、嵐山左岸に比べて遺跡の分布密度が低く、奈良時代に創建されたと伝えられる法輪寺、立会調査によって確認された平安時代の嵐山谷ヶ辻子町遺跡¹⁾が知られるのみである。平安時代の班田図によると葛野郡の条里が調査地付近に施行されている。古代には、葛野郡の山田郷に属していたものと考えられる。付近には旧葛野郡の四大幹線の一つ、四条街道が存在する。また、調査地の南側を流れる一井川は、法輪寺橋下流を取水口とし、桂川中流域の諸荘園を灌漑するために中世に開鑿された桂川用水の一つである。

註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所 『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊 1995 年

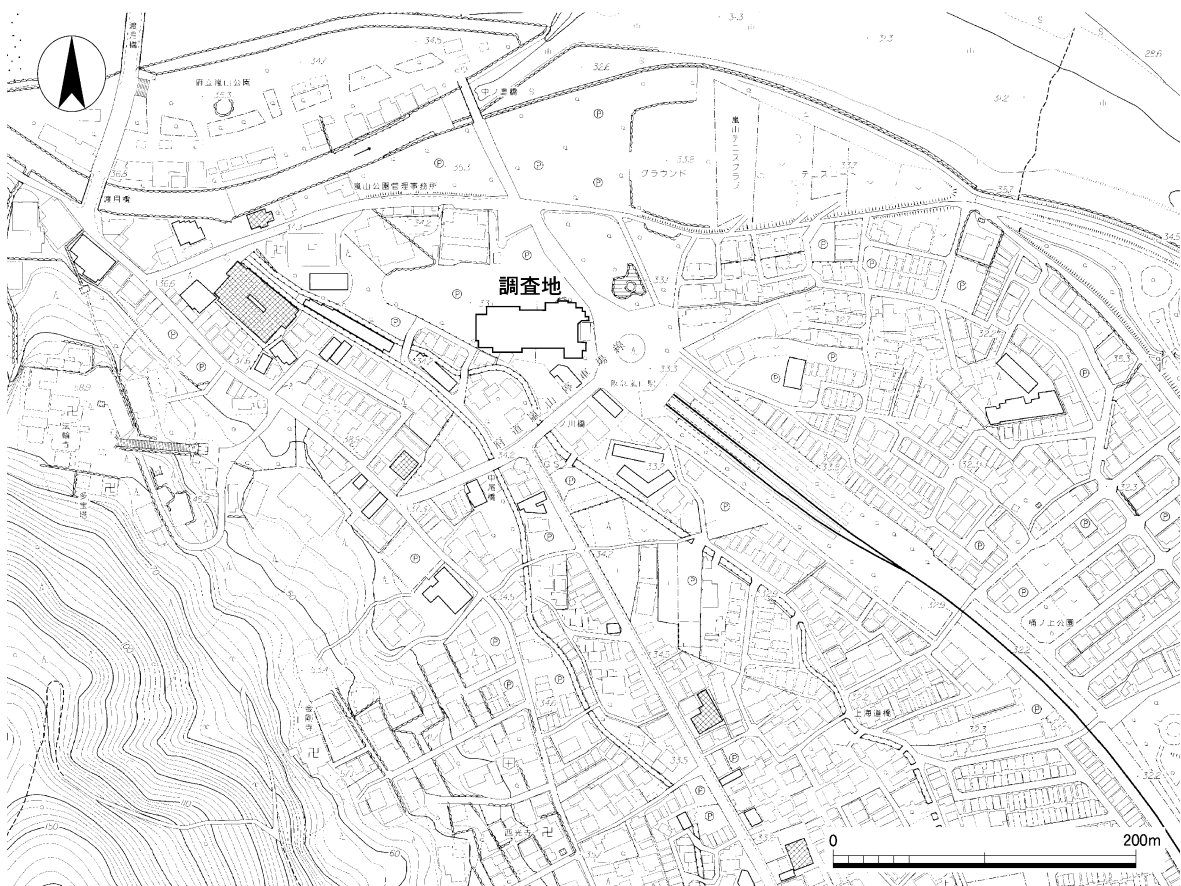


図2 調査地位置図 (1 : 5,000)



図3 調査前全景（西から）



図4 調査風景（東から）

3. 遺 構

(1) 基本層序（図5～7）

基本層序は、地表下約0.5～1.0 mまでが現代の盛土であり、灰オリーブ粘質土（近代耕作土、図5-1）、黄褐色粘質土（近代床土、図5-2・3）の順に堆積する。以下、調査区の東半部では、自然流路の堆積層で砂礫層が主となる。西半部は、黄褐色粘質シルト（中世耕作土、図5-23）、黄褐色粘土質シルト（中世耕作土、図5-24）順に堆積し、にぶい黄褐色シルト（図5-43・44）となる。にぶい黄褐色シルトは土師器の細片が含まれるが、粒子は均質で細かく人工的に客土したものではなく、自然に堆積したものと考えられる。にぶい黄褐色シルトの下層は砂礫層となり径0.5 m前後の礫が多く含まれている。調査区の西端部は自然堤防の裾部にあたり、他の箇所より約0.5 m高くなる。

(2) 遺構の概要（表1）

近世から現代の耕土・床土を除去した面が第1面であり、室町時代末から江戸時代前期の耕作地・自然流路・土坑などを検出した。中世の耕土と一部床土を除去した面を第2面とし、耕作に伴う溝（鋤などで耕作した痕跡・過剰な水分を抜くための溝）・土坑・畦畔の基底部分など中世の耕作土に付随する遺構群を検出した。ただし、南西部の高台部では両者の中間の面が確認されている。

(3) 第1面の遺構（図8、図版1）

表1 遺構概要表

| 時 代 | 遺 構 | 備 考 |
|-----------|---|-----|
| 鎌倉時代～室町時代 | 土坑12～14・48・52、溝20～34・40・47・51 畦畔9・54～57、田41～46、58～60 | |
| 室町時代末期 | 川1・2・4、土坑3 | |
| 江戸時代 | 土坑36～39 | |

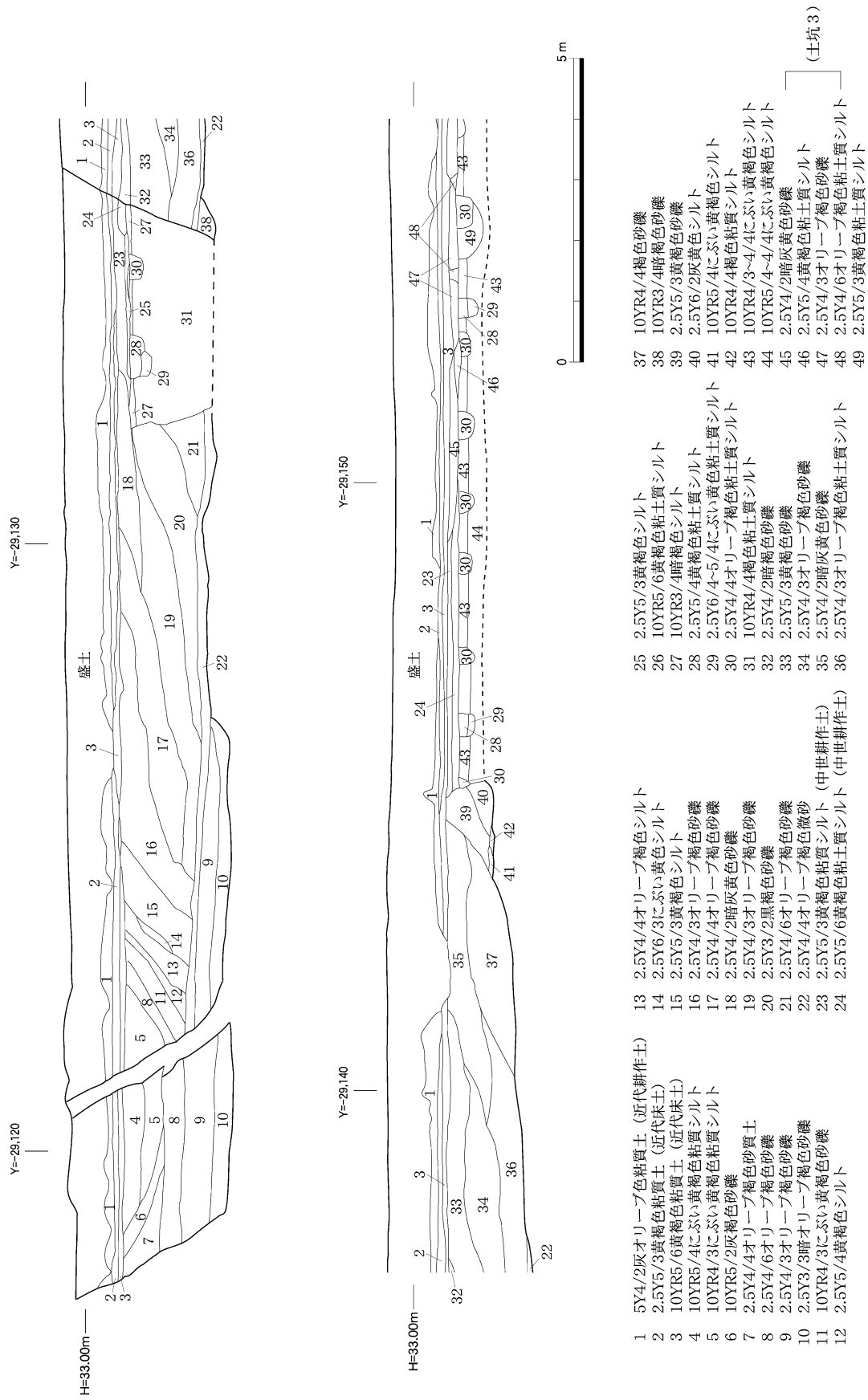


図5 調査区南壁断面図1 (1:100)

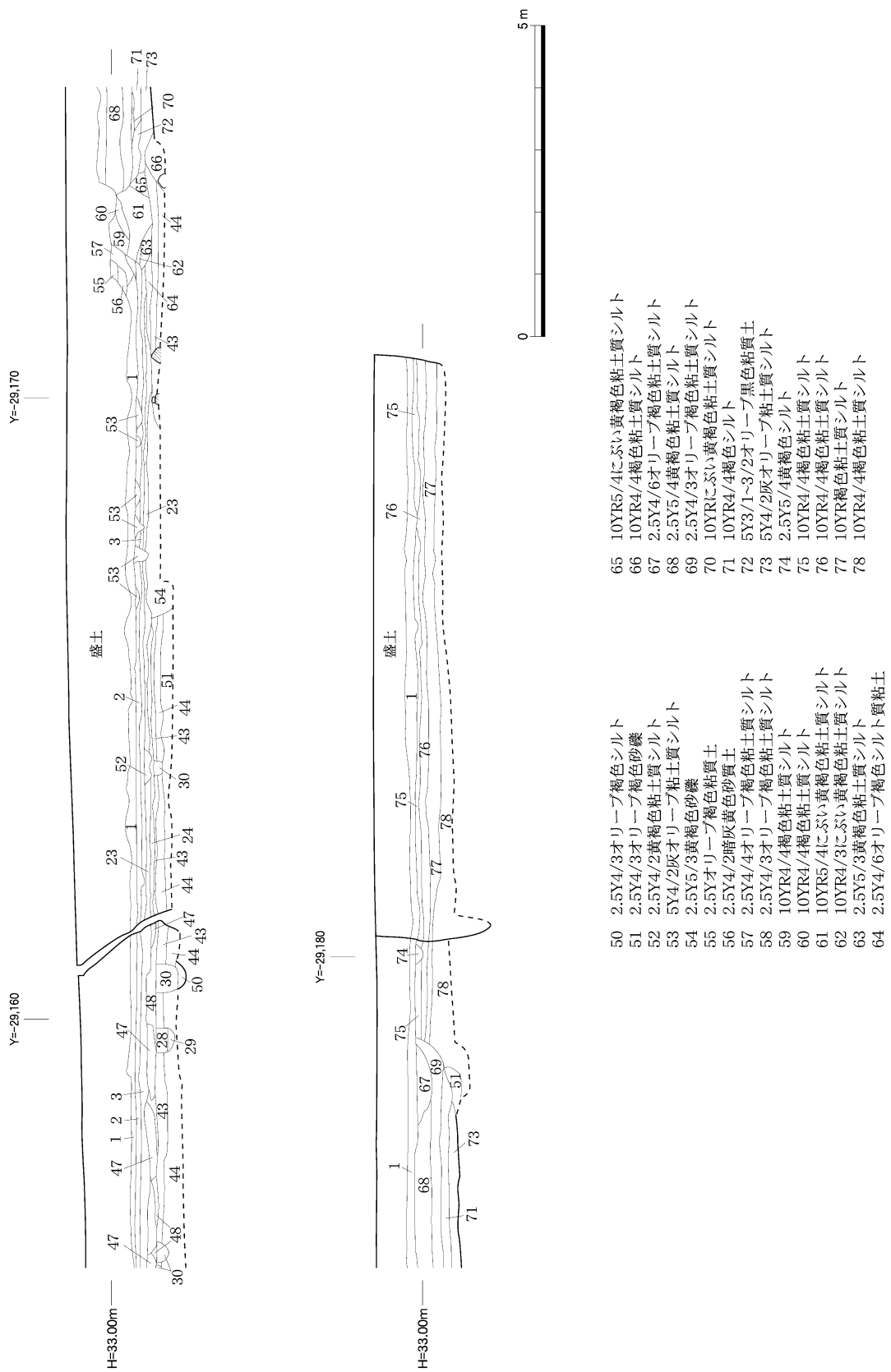


図6 調査区南壁断面図2 (1:100)

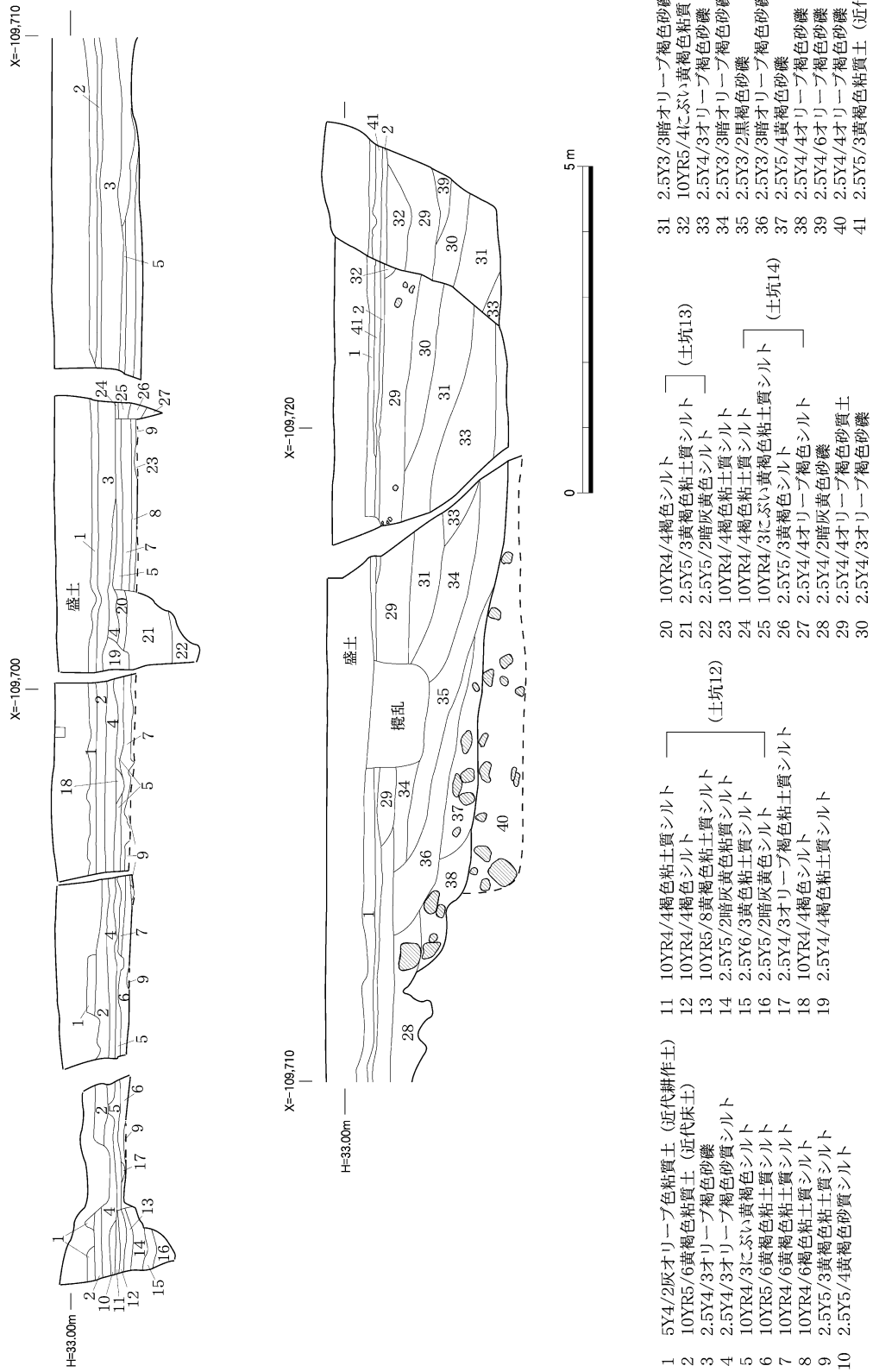


図7 調査区東壁断面図 (1 : 100)

江戸時代の遺構

土坑 36 (図 9、図版 4-1) 調査区の北西隅で検出した円形の土坑で、底部に径 1.5 m の桶を据えた痕跡がみとめられる。土坑 37・38 と東西に並んでいる。径 1.6 ~ 1.8 m、深さ 0.9 m である。埋土は灰黄褐色粘質土、灰色粘土の順に堆積し、桶内の埋土は灰オリーブ色粘土である。

大正年間の地図に、調査区の北辺に沿って水路がみられ、この水路は江戸時代のもの踏襲していると考えられる。したがって、この土坑は水路もしくはそれに沿う農道脇に設置された肥溜の可能性が高い。

出土した遺物には、土師器の皿、肥前磁器の染付椀、肥前陶器の椀がある。江戸時代後期の遺物である。

土坑 37 調査区の北西隅で検出した円形の土坑で、底部に桶を据えた痕跡がみとめられる。東半部のみ検出で径約 1.8 m、深さ 1.0 m 以上である。埋土は灰オリーブ色粘土が主である。肥溜として使用されたものと考えられる。

出土した遺物には、肥前磁器の染付椀、施釉(鉄釉)陶器、平瓦、獣骨片などがある。江戸時代後期の遺物である。

土坑 38 土坑 36 と土坑 37 の間で検出した円形の土坑である。径 1.2 m、深さ 1.0 m である。埋土は褐色シルトを主とする。肥溜として使用されたものと考えられる。

出土した遺物には土師器の皿がある。江戸時代後期の遺物である。

土坑 39 (図 9、図版 4-2) 調査区の西辺の中央で検出した円形の土坑で、底部に径 1.5 m の桶を据えた痕跡がみとめられる。径 2.1 m、深さ 0.6 m である。埋土は灰黄褐色の砂礫層が主で、桶内には灰褐色粘土と灰色粘土が堆積している。肥溜として使用されたものと考えられる。

出土した遺物には、土師器の皿、施釉陶器の椀、焼締陶器(信楽)の播鉢、銭貨(寛永通寶)がある。江戸時代前期の遺物である。

室町時代末期の遺構

川 1 (図 10、図版 4-5) 調査区のほぼ全域で検出した、北西から南東へ直線的に流れの方向をもつ自然流路である。幅は上流では約 8 m で、下流にいくほど扇形に幅を拡げ約 16.5 m となる。深さも北西で約 0.8 m、下流になるほど深さを増し南東で約 1.7 m である。堆積層は砂礫層が主で、斜め方向の堆積が目立つ。底部にわずかに数 cm の厚さでシルトが堆積している。深さの浅い上流部では底面は黄褐色シルトで、埋土に砂礫層をもつ幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m の小溝を密に検出した。下流では底面は砂礫層となる。

この川は、恒常的に流れを維持していたのではなく、桂川が氾濫した時に水が一気に流れ過ぎた痕跡であると考えられる。上流部の川底で検出した礫を含んだ溝群は、洪水による浸食の激しさを具現したものと考えられる。調査地の北東部では、桂川が流路を東からほぼ直角に南に屈曲しており、渡月橋から調査地を経て松尾橋を結ぶ線は流れの最短距離となり洪水時には水が流れやすかったと考えられる。

出土した遺物は少なく、ほとんどが細片で磨滅が激しい。土師器の皿、須恵器の杯・甕、瓦器の鍋、

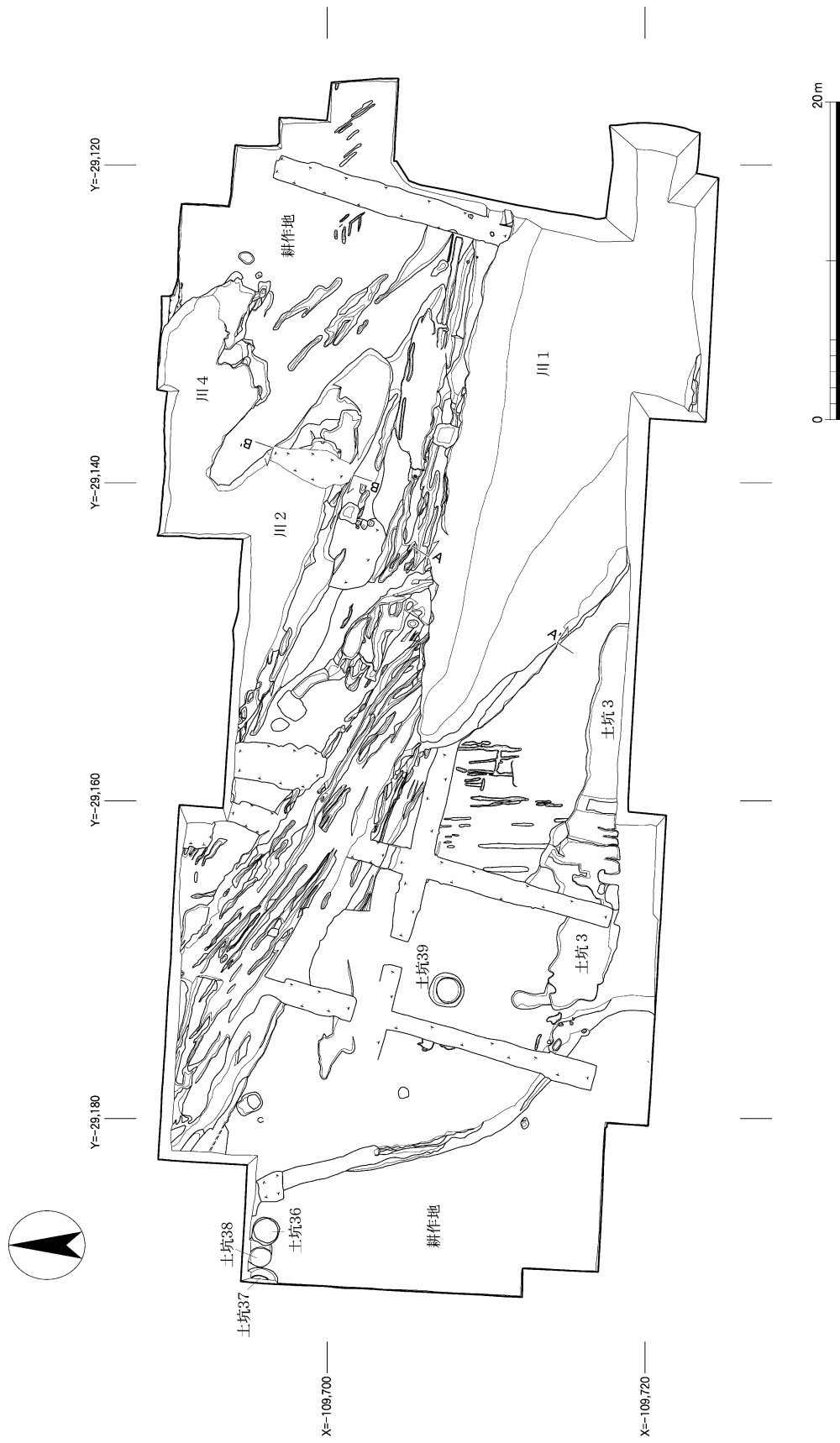


図8 第1面遺構平面図(1:400)

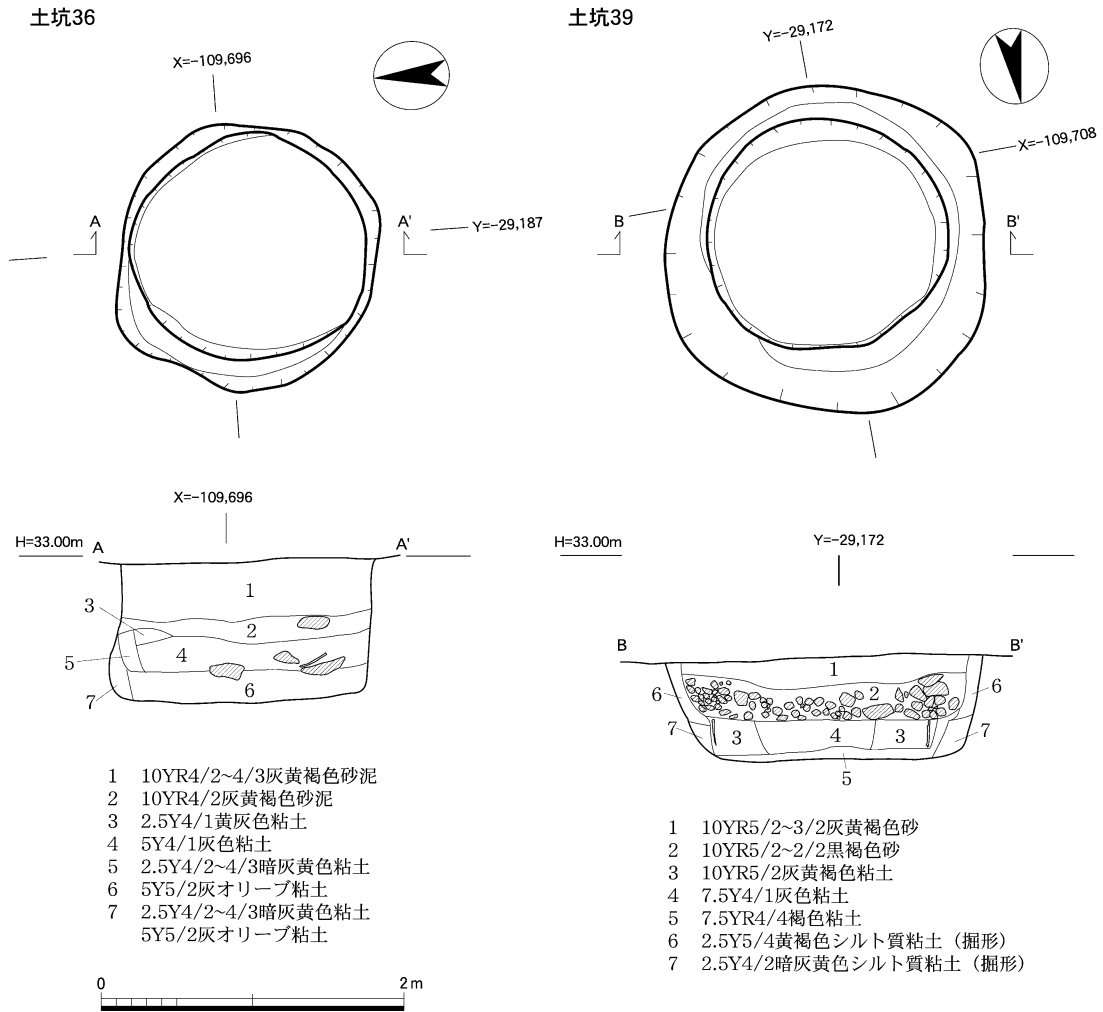


図9 土坑 36・39 実測図 (1 : 50)

輸入青磁の椀、施釉陶器の椀・天目椀、平瓦などが出土している。室町時代末期の遺物である。

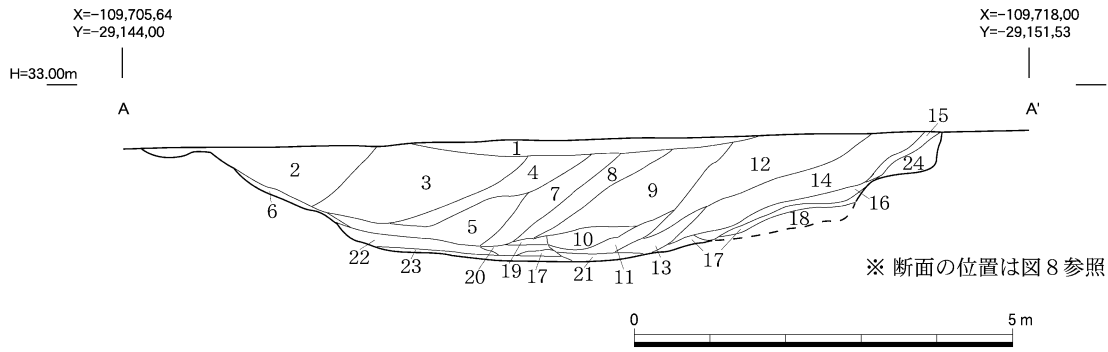
川2 (図11、図版4-4) 川1のすぐ北側で検出した、自然流路である。川1と併行するが、流れは途切れている。幅は約11m、深さは約1.1mで、埋土は砂礫層が主となる。洪水時に生じた水流の痕跡だと考えられ、流れが途切れることもその傍証になる。

出土した遺物には、土師器の皿、瓦器の鍋、焼締陶器の甕・播鉢などがある。室町時代末期の遺物である。

川4 川2のすぐ北側で検出した、自然流路である。川1・2と併行するが、流れは途切れている。幅は約8m、深さは約0.7mで、埋土は砂礫層が主となる。川2と接続し、同一水流が分れた末端部であると考えられる。

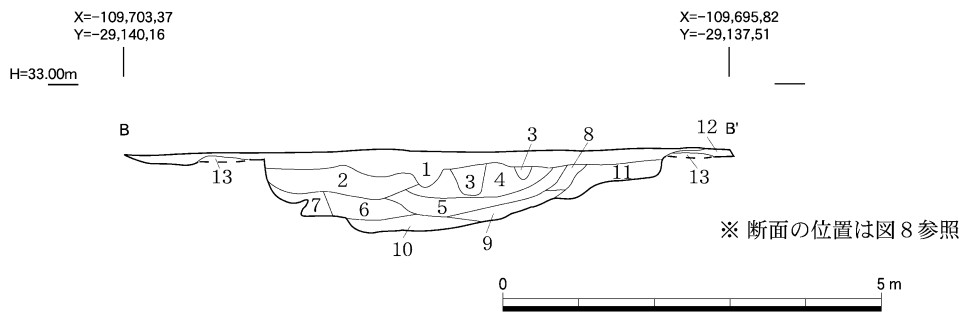
出土した遺物には、土師器の皿などがある。室町時代末期の遺物である。

土坑3 (図版4-3) 調査区の中央部南端で検出した、東西に長い不整形な土坑である。東西長24.5m、南北幅3.0~5.0m、深さで0.1~0.2m、埋土は砂礫である。土坑の東半部では、底部が0.3~1.5mの間隔に断面三角形・台形の畝状の土盛りによって仕切られている。三角形のものは幅0.2~0.3m、台形のものは幅0.8mである。耕作地に付随する施設と考えられるが、



- | | | |
|-------------------|--------------------|---------------------|
| 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫 | 9 2.5Y5/3黄褐色砂礫 | 17 5Y5/2灰オリーブ色シルト |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 | 10 2.5Y2/1黒色砂礫 | 18 10YR3/3暗褐色砂礫 |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 | 11 2.5Y2/1黒色砂礫 | 19 10YR4/4褐色砂礫 |
| 4 10YR4/4褐色砂礫 | 12 2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫 | 20 5Y5/2灰オリーブ色シルト |
| 5 2.5Y3/1黒褐色砂礫 | 13 2.5Y2/1黒色砂礫 | 21 10YR5/4にぶい黄褐色シルト |
| 6 10YR1.7/1黒色砂礫 | 14 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫 | 22 2.5Y4/3オリーブ褐色砂 |
| 7 2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫 | 15 2.5Y5/3黄褐色シルト | 23 10YR4/4暗褐色砂 |
| 8 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 | 16 5Y5/2灰オリーブ色シルト | 24 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 |

図 10 川 1 断面図 (1 : 100)



- | | | |
|--------------------|--------------------|-------------------|
| 1 10YR4/4褐色砂泥 | 6 N2/0黒色砂礫 | 11 7.5YR5/6明褐色砂礫 |
| 2 7.5YR3/2黒褐色粗砂入り礫 | 7 7.5YR4/6褐色砂礫 | 12 2.5Y5/2暗灰黄色シルト |
| 3 4.5YR2/3極暗赤褐色砂礫 | 8 N2/0黒色砂礫 | 13 10YR4/4褐色粘質土 |
| 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂礫 | 9 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 | |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 | 10 2.5YR2/3極暗赤褐色砂礫 | |

図 11 川 2 断面図 (1 : 100)

正確な用途は不明である。

出土した遺物には、土師器の皿、施釉陶器（瀬戸）の鉢、輸入青磁の椀などがある。室町時代末期の遺物である。

耕作地 調査区の全域で検出した水田跡である。自然堤防の裾部にあたると考えられる調査区の西端部では、耕作面が約 0.5 m 高くなっている。検出面では、近世の水田に伴う耕作溝は検出したが、畦畔などの施設は検出されなかった。また、高台部の南端の東に突出した部分は、江戸時代の前期に下層の耕作地（田 42）の上に客土・造成している。

桂川の氾濫によって破壊されている。川 1・2・4 がその痕跡である。川 1 より北では、耕土の上面が厚さ 10 ～ 20 cm の砂礫で覆われている。

小溝群 川 1 より北側の耕土上面で検出した。特に川 1 と川 2 の間に密集している。幅 0.2 ～ 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.6 m である。埋土は砂礫層で川 1 の川底で検出した溝群と同様に洪水による

水流の痕跡だと考えられる。

(4) 第2面の遺構(図12、図版2)

第1面の耕作土を除去した状態で検出した遺構群である。自然堤防の裾部にあたりと考えられる調査区の西辺では、耕作地が棚田状に高低差をもつことがわかった。主な遺構として、第1面で検出した耕作土に伴う畦畔の痕跡、耕作に伴う小溝(鋤による耕作痕)群、耕作地の造成時に設置された溝群、土坑などを検出している。高低差・畦畔の痕跡によって、1筆毎の水田を確認することができた。

畦畔9(図版3-1) 調査区の北東部で検出した、畦畔の痕跡である。北西-南東方向の傾きをもち、若干蛇行する。幅は0.5~0.7mである。田58と田59を区切っている。西側を川2に破壊されている。

畦畔54(図版4-8) 調査区の北西部で検出した、南北方向の畦畔の痕跡である。幅は約2.0mである。田45と田60を区切っており、畦畔55・56と接続している。北側を川1に破壊されている。

畦畔55(図版4-8) 畦畔54の西側で検出した、東西方向の畦畔の痕跡である。幅は0.5~1.5mである。田45と田43を区切っており、畦畔57と接続する。西側は途中で痕跡が消えている。

畦畔56(図版4-8) 畦畔54の東側で検出した、東西方向の畦畔の痕跡である。幅は2.0mである。田60と田44を区切っている。北・東側を川1に破壊されている。

畦畔57 畦畔55の南側で検出した、南北方向の畦畔の痕跡である。幅は0.5~0.6mである。田43と田44を区切っており、南側で田42の東側周縁部と接続する。

田41 調査区の西端で検出した耕作地跡である。調査区の最高所にある。マンガン分の滞留はみとめられるが、耕作の痕跡はない。北側の一部を田60の埋立てによって造成している。

出土した遺物には、土師器の皿・甕、瓦器の椀、東播系須恵器の鉢、輸入青磁の椀などがある。鎌倉時代から室町時代の遺物である。

田42 田41の南端の東側で検出した耕作地跡である。北側で田43、南側で田44と接する。田41と田43・44と間の高さにある。マンガン分の滞留はほとんどみられず、耕作の痕跡もない。

田43 西の田41、南の田42、東の田44、北の田45に囲まれている。逆台形を呈し、中央部で東西幅約8.0m、南北幅約10.0mである。底部にマンガン分の滞留が多くみとめられる。また、東西方向と田41の東側周縁と平行して、耕作痕と考えられる幅0.15~0.3m、深さ0.05mの小溝を検出した。

出土した遺物には土師器の皿、東播系須恵器の鉢がある。鎌倉時代から室町時代の遺物である。

田44(図版3-2) 北を畦畔56、西を畦畔57に囲まれた耕作地跡である。北・東側を川1に破壊されている。底部にマンガン分が厚く滞留している。畦畔56と平行した方向に、鋤による耕作痕と考えられる幅0.15~0.3m、深さ0.05mの小溝群を多数検出した。マンガン堆積の下面に耕作溝と直交する方向に溝(溝20~34)を検出した。また、北西隅に土坑52がある。

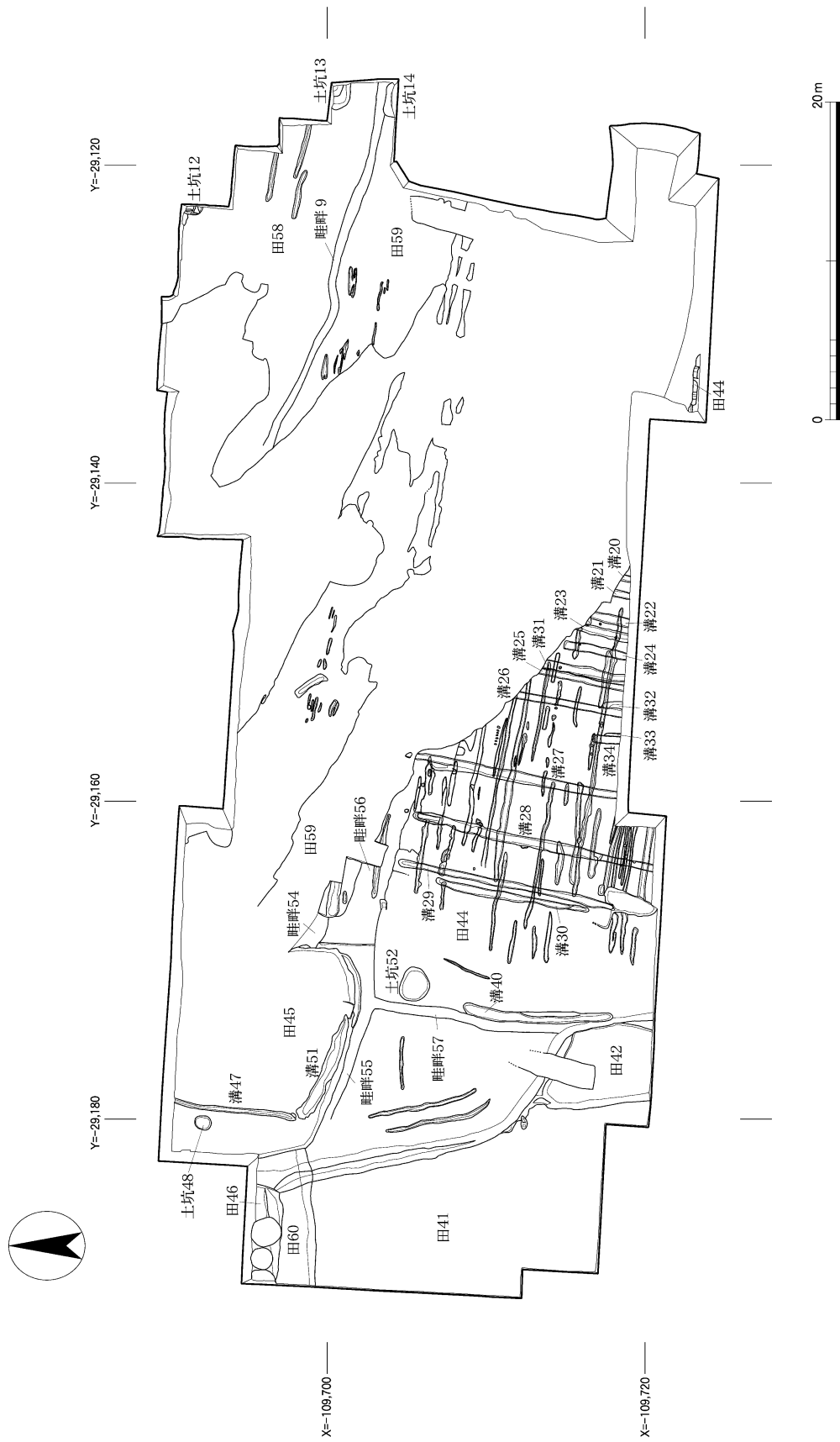


图 12 第 2 面遺構平面図 (1 : 400)

出土した遺物には、土師器の皿、瓦器の椀・鍋などがある。鎌倉時代から室町時代の遺物である。

田 45 南を畦畔 55、東を畦畔 54 に囲まれた耕作地跡である。北側を川 1 に破壊されている。底部にマンガン分の滞留がみとめられるが、耕作痕は検出されていない。土坑 48、溝 47・51 を検出した。

出土した遺物には土師器の皿、瓦器の椀・皿がある。鎌倉時代から室町時代の遺物である。

田 46 田 41 の北側で検出した耕作地跡である。田 41 と田 43 の中間の高さにある。マンガン分の滞留はほとんどみられず、耕作の痕跡もない。田 60 を埋立てて造成している。

出土した遺物には土師器の皿がある。鎌倉時代から室町時代の遺物である。

田 58 (図版 3-1) 調査区の北東辺で検出した。畦畔 9 を境にして田 59 の北側に位置する。西側を川 4 に破壊されている。底部にマンガン分の滞留がみとめられる。東西方向の耕作に伴う溝を検出したが、分布はまばらである。

出土した遺物には土師器の皿、輸入青磁の椀がある。鎌倉時代から室町時代の遺物である。

田 59 (図版 3-1) 田 58 の南側に位置するが、北側を川 2、南側を川 1 に破壊され、島状に残存するのみである。元来は畦畔一 9・54・56 に囲まれた東西に細長い耕作地であった可能性が高い。底部にマンガン分の滞留がみとめられる。東西方向の耕作に伴う溝を検出したが、分布はまばらである。田 45・田 58・田 59 の底面の標高は、ほぼ同じである。

出土した遺物には土師器の皿、瓦器の椀がある。鎌倉時代から室町時代の遺物である。

田 60 田 41 の北端と田 46 の下層で検出した耕作地跡である。マンガン分の滞留はみとめられるが、耕作の痕跡はない。元は田 45 と一連の耕作地であった可能性が高い。

土坑 12 (図版 4-6) 調査区の北東隅で検出した土坑である。一部のみの検出で、全体の形状・規模は不明である。深さは 0.8 m、埋土は暗灰黄色のシルトを主とする。

出土した遺物には、土師器の皿がある。室町時代後期の遺物である。

土坑 13 (図版 4-7) 調査区の東端の北辺で検出した土坑である。一部のみの検出で、全体の形状・規模は不明である。深さは 1.3 m、埋土は黄褐色のシルトを主とする。

出土した遺物には、土師器の皿がある。室町時代後期の遺物である。

土坑 14 土坑 13 の約 2 m 南で検出した土坑である。一部のみの検出で、全体の形状・規模は不明であるが、東西幅は 2.1 m、深さは 1.1 m である。埋土は、黄褐色のシルトを主とする。

出土した遺物には、土師器の皿、瓦器の椀がある。室町時代後期の遺物である。

土坑 48 田 45 の底部で検出した円形の土坑である。径 0.85 ～ 1.05 m・深さ約 0.1 m で、埋土は灰褐色粘土である。

出土した遺物には、土師器の皿がある。鎌倉時代の遺物である。

土坑 52 田 44 の北西隅で検出した不整形の土坑である。径 1.8 ～ 2.1 m・深さ約 0.2 m で、埋土は灰黄褐色シルトである。

出土した遺物には、土師器の皿がある。鎌倉時代から室町時代の遺物である。

溝 20 ～ 34 (図版 3-2) 田 44 の底部で検出した溝群である。溝が一部重なる箇所もあるが、

東半部では溝の間隔は 1.0 ～ 1.5 m、西半部では溝の数が少なくなり 3.5 ～ 4.2 m の間隔になる。幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.15 ～ 0.35 m で、埋土は単層のものと二層に分れるものがある。マンガン層の上面で輪郭を確認することができたが、本来はマンガン滞留層の下面、耕作地が造成されたときに造られたと考えられる。耕作地の過剰な水分を処理するために設けられた溝であると考えられる。

出土した遺物には、土師器の皿、輸入白磁の椀などがある。鎌倉時代の遺物である。

溝 40 畦畔 57 の東側に沿って検出した溝である。幅 0.6 ～ 0.7 m、深さ 0.05 ～ 0.1 m で、埋土は灰黄褐色シルトである。

出土した遺物には、土師器の皿がある。鎌倉時代の遺物である。

溝 47 田 45 の底部で検出した南北方向の溝である。幅 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.05 ～ 0.15 m で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土した遺物には、土師器の皿、瓦器の椀がある。鎌倉時代の遺物である。

溝 51 田 45 の南辺に沿って検出した溝である。幅 0.6 ～ 1.1 m、深さ 0.05 ～ 0.1 m で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土した遺物には、土師器の皿がある。鎌倉時代の遺物である。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表2)

今回出土した遺物は、整理箱に8箱ある。大半は土器類で、瓦・木製品・金属製品・銭貨が少量混じる。ほとんどの土器類は小・細片で、しかも磨滅が激しい。したがって、図化した土器の中には口径が復元できなかったものも多い。

平安時代の遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器などがあるが、すべて二次堆積の遺物である。

鎌倉時代から室町時代の遺物には、土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、金属製品などがある。室町時代末期の遺物には、土師器、施釉陶器などがある。

江戸時代前期の遺物には、土師器、施釉陶器、焼締陶器、銭貨などがある。

江戸時代後期の遺物には、土師器、施釉陶器、染付磁器などがある。

(2) 土器類 (図13・14)

現代層出土の土器(1～6) 1～4は土師器である。1は口縁端部が大きく外反する皿である。口縁部・内面はナデを施すが、底部は無調整である。復元口径は15.6cmで、胎土は密で石英・長石を若干含む。焼成は良好で、色調は灰白色である。2・3は杯である。口縁部は外反し、端部は短く立ち上がる。復元口径は2が13.8cm、3が15.6cmである。口縁部・内面はナデ調整、体部下半には指オサエがみとめられるが、底部は無調整である。両者ともに、胎土は密で石英・長石を若干含む。焼成は良好で、色調は灰白色である。4は甕である。口縁端部は内側に折れ曲っている。外面全体にススが付着している。口縁部はナデ調整、頸部下半は指オサエ、頸部内面は成形時の痕跡を残す。復元口径は24.2cmで、胎土は密で石英・長石を若干含む。焼成は良好で、色調は灰黄褐色である。

5は黒色土器A類の椀の高台部である。断面三角形の高台を貼り付ける。内面に細かいミガキ

表2 遺物概要表

| 時 代 | 内 容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|---------------|---------------------------------------|--------|--|--------|--------|
| 平安時代 | 土師器、須恵器、黒色土器、 緑釉陶器、灰釉陶器 | | 土師器4点、黒色土器1点、 緑釉陶器1点 | | |
| 鎌倉時代 ～室町時代 | 土師器、瓦器、施釉陶器、焼 締陶器、輸入陶磁器、瓦、金 属製品 | | 土師器10点、瓦器5点、施釉 陶器2点、焼締陶器2点、輸 入磁器2点 | | |
| 江戸時代 | 土師器、施釉陶器、焼締陶器、 染付磁器、石製品、銭貨 | | 土師器2点、施釉陶器2点、 焼締陶器2点 | | |
| 合 計 | | 9箱 | 33点(1箱) | 8箱 | 0箱 |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

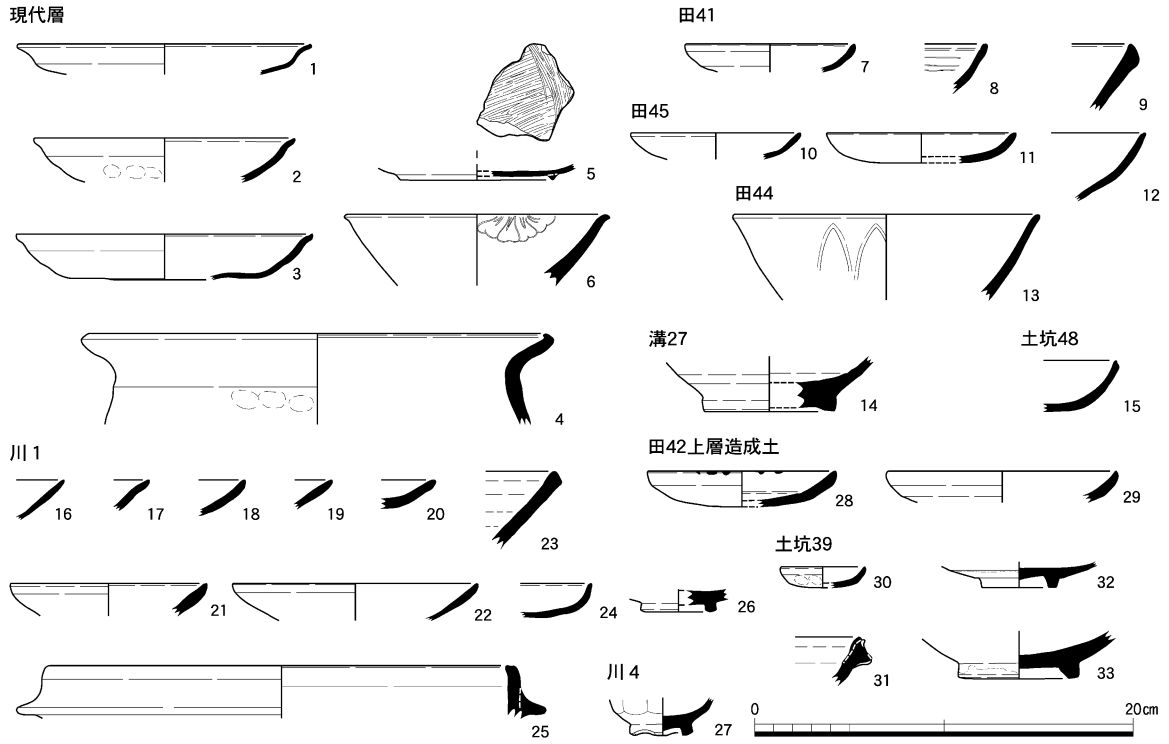


图 13 出土土器实测图 (1 : 4)

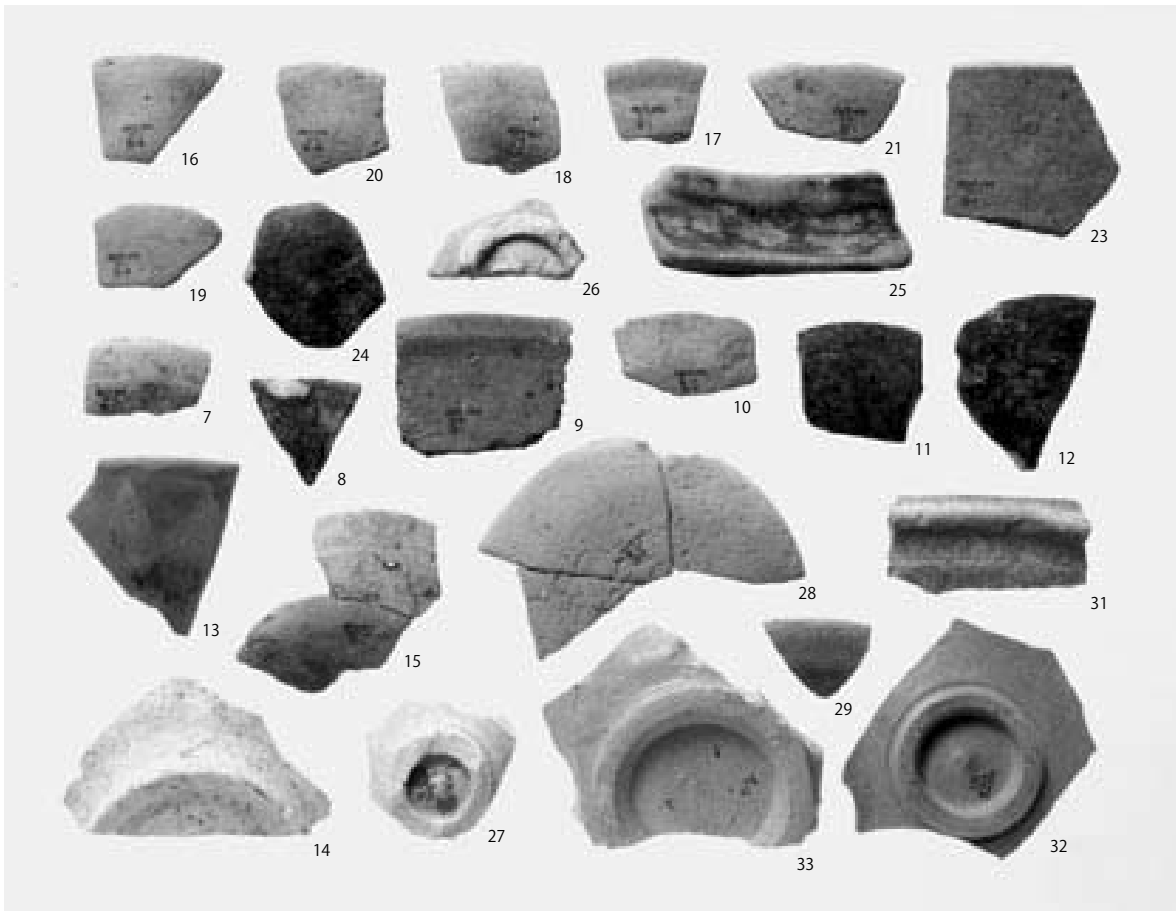


图 14 出土土器

を施す。復元底径は 8.0 cm で、胎土は密で石英・長石を若干含む。焼成は良好で、色調は灰黄色である。

6 は緑釉陶器の椀である。口縁端部は若干外反し、口縁内部に印刻花文を描く。全面に明緑灰色の釉を施す。復元口径は 13.6 cm、胎土は密で、焼成は良好である。

1～6 は平安時代中期の土器である。

田 41 出土の土器（7～9） 7 は復元口径が 8.8 cm の小型の土師器皿である。平らな底部から体部がゆるやかに外上方にのび、口縁端部は丸味をおびる。口縁部はナデ調整を施す。胎土は密で石英・長石を含む。焼成は良好で、色調は淡橙色である。

8 は瓦器の椀である。口縁端部内面に浅い沈線がめぐる。口縁部はナデ、体部外面は指オサエ内面はミガキを施す。小片のため、口径は復元できない。胎土は密で石英・長石を含む。焼成は不良で、色調は暗灰色である。

9 は東播系須恵器の鉢である。口縁部は内・外方に肥厚し、口縁の内面は若干凹む。回転を利用したナデ調整を施す。小片のため、口径は復元できない。胎土は密で石英・長石を含む。焼成は良好で、色調は灰色である。

7～9 は鎌倉時代から室町時代の土器である。

田 45 出土の土器（10～12） 10 は復元口径が 8.9 cm の土師器の皿である。磨滅が激しく詳細な調整は不明である。胎土は密で、石英・長石・チャートを含む。焼成は不良で、色調は浅黄橙色である。

11・12 は瓦器である。11 は皿、12 は口縁端部内面に浅い沈線がめぐる椀である。11 は復元口径が 9.9 cm、12 は小片のため、口径は復元できない。ともに、磨滅が激しく詳細な調整は不明である。胎土は密で、石英・長石を含む。焼成は不良で、色調は黒色である。

10～12 は鎌倉時代から室町時代の土器である。

田 44 出土の土器（13） 輸入青磁の椀である。外面に蓮弁を陽刻する。復元口径は 16.0 cm で、胎土は密で、焼成は良好である。淡緑灰色の釉が全面にかかる。鎌倉時代から室町時代の土器である。

溝 27 出土の土器（14） 輸入白磁の椀である。復元高台径は 6.8 cm である。ロクロ成形で、高台は削り出している。内面に灰白色の釉がかかるが、体部下半・高台は露胎である。胎土は密で、焼成は良好である。鎌倉時代の土器である。

土坑 48 出土の土器（15） 平らな底部から体部がゆるやかに外上方にのび、口縁端部断面は三角形を呈する。小片のため、口径は復元できない。口縁部・体部内面はナデ調整、内底面は仕上げナデ、体部外面・底部は無調整である。胎土は密で、長石を含む。焼成はやや不良で、色調は浅橙色である。鎌倉時代の土器である。

川 1 出土の土器（16～26） 16～22 は土師器の皿である。16～20 は小片のため、口径は復元できない。21 の復元口径 10.4 cm、22 は 12.9 cm である。いずれも、口縁部と内面をナデ調整、体部は無調整である。胎土は密で石英・長石を含む。焼成は良好で、色調は 16・22 灰白色は、

17・18は浅黄橙色、他はにぶい橙色である。鎌倉時代から室町時代の土器である。

23は東播系須恵器の鉢である。回転を利用したナデ調整を施す。小片のため、口径は復元できない。胎土は密で石英・長石を含む。焼成は良好で、色調は灰色である。鎌倉時代の土器である。

24・25は瓦器である。24は皿で、平らな底部から体部がゆるやかに外上方にのび、口縁端部は丸味をおびる。小片のため、口径は復元できない。口縁部はナデ調整を施すが、他は磨滅が激しく詳細な調整は不明である。胎土は密で、石英・長石を含む。焼成は不良で、色調は黒色である。25は羽釜で、鐙は短く丸味をおび、口縁端部は内傾する。胎土は密で、石英・長石を含む。焼成は不良で、色調は暗灰色である。鎌倉時代から室町時代の土器である。

26は施釉陶器の椀の高台部である。復元高台径は3.3cmである。ロクロ成形で、高台は削り出している。内面に白色の釉がかかるが、高台は露胎である。胎土は密で、焼成は良好である。室町時代末期の土器である。

川4出土の土器(27) 施釉陶器の小椀である。高台径は3.0cmである。ロクロ成形で、高台は削り出している。体部は、縦方向にヘラで面取りをしている。高台を4箇所抉りとして、窪ましている。内底面にトチンの跡があり、高台内部には朱が付着している。内面に灰白色の釉がかかるが、底部・高台は露胎である。胎土は密で、焼成は良好である。室町時代末期の土器である。

田42上層造成土出土の土器(28・29) 28は土師器の皿である。復元口径は9.9cmである。丸味をおびた底部から、低く外上方に体部・口縁部がのび、口縁端部断面は三角形を呈する。内底面と体部との境に圈線がめぐる。口縁端部にススが付着する。胎土は密で、石英・長石・チャートを含む。焼成は良好で、色調は橙色である。

29は焼締陶器の皿である。復元口径は12.0cmである。ロクロ成形で、内面に灰白色の釉がかかる。胎土は密で、焼成は良好である。色調はにぶい橙色である。

28・29は江戸時代前期の土器である。

土坑39出土の土器(30～33) 30は手捏ねの小型の皿である。復元口径は4.4cmである。胎土は密で、長石・チャートを含む。焼成は良好で、色調は浅黄色である。

31は焼締陶器(信楽)の擂鉢である。小片のため、口径は復元できない。口縁外面に断面三角形の凸帯がつく。回転を利用したナデ調整を施す。胎土はやや粗くて、石英・長石を含む。焼成は良好で、色調は橙色である。

32・33は施釉陶器の椀である。どちらも、ロクロ成形で、高台は削り出している。高台径は、32が3.9cm、33は5.3cmである。32は内面と体部外面に灰オリーブ色の釉がかかる。33は高台内面を除いて全面に灰白色の釉がかかる。ともに胎土は密で、焼成は良好である。

30～33は江戸時代前期の土器である。

5. ま と め

嵐山地区の桂川左岸域（嵯峨野）は、古くから開発されてきたのはよく知られている。一方、右岸域は松尾山と桂川に挟まれた狭隘な土地で、大規模な開発がなされる余地はもともと少なかったと考えられる。当地の歴史を概略的に述べれば、奈良時代に法輪寺が創建され、『山城国葛野郡班田図』の記載によれば9世紀に条里を施行し、中世に桂川用水が開鑿された事が知られるのみである。これまで、その実態はあまり明らかにはされていなかった。

今回の調査で、嵐山地区における桂川右岸の開発の歴史の一端を知ることができた。

調査により、近代の耕作土の下から、江戸時代の土坑・耕作地造成の跡、室町時代末期の洪水に伴うと考えられる自然流路、鎌倉時代から室町時代の耕作関連遺構（水田・畦畔・溝・土坑）を検出した。

これらの遺構・堆積土層の検討の結果、調査地は元々桂川右岸の氾濫原で地形的に不安定な場所であったが、徐々にシルトが堆積して土地が安定化していく。そして、鎌倉時代になって、耕作地として開発されるようになる。自然堤防の裾部にあたると考えられる調査区の西辺では、耕作地が棚田状に高低差をもって造成されることがわかった。途中一部に改変が加えられるが、室町時代を通じて耕作が営まれていたと考えられる。しかし、室町時代末期に大規模な洪水にあって耕作地が大きな被害を蒙ったと考えられる。その後、完全に土地が安定するのは、江戸時代前期になってからで、再び耕作地として活用される。

また、二次堆積ではあるが、平安時代中期の遺物が出土していることから周辺に当該期の遺跡が存在している可能性が考えられる。

版 图

報 告 書 抄 録

| ふりがな | しせき・めいしょう あらしやま | | | | | | | |
|-----------------------------------|--|---------------|---------------|-------------------|---------------------------------------|--------------------------------|--------|------|
| 書名 | 史跡・名勝 嵐山 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2008-14 | | | | | | | |
| 編著者名 | 木下保明・櫻井みどり | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | |
| 発行所 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2009年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| しせき・めいしょう 史跡・名勝 あらしやま 嵐山 | きょうとしにしきょうく 京都市西京区 あらしやまにしいちかわちよう 嵐山西一川町 5-4、6-1、6-3、 6-4、7-1、20、 30 | 26100 | | 35度 00分 38秒 | 135度 40分 50秒 | 2008年9月 24日～2008 年12月26日 | 2,088㎡ | 建設工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 史跡・名勝 嵐山 | 史跡・ 名勝 | 平安時代 | | | 土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器 | | | |
| | | 鎌倉時代 ～室町時代 | 畦畔、田、土坑、 溝 | | 土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、輸入陶 磁器、瓦、金属製品 | | | |
| | | 室町時代末期 | 川、土坑 | | 土師器、施釉陶器 | | | |
| | | 江戸時代 | 土坑 | | 土師器、施釉陶器、焼 締陶器、染付磁器、銭 貨 | | | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-14

史跡・名勝 嵐山

発行日 2009年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961